

妙高市文化ホール開館30周年記念事業 岡倉天心原作“幻のオペラ『白狐』”を、 平井秀明が書き下ろし世界初演

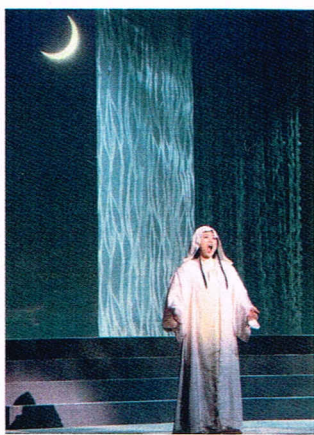


第1幕 最終場 フィナーレ「降伏せよ」

日本近代美術の父・岡倉天心の絶筆となった英文オペラ台本「白狐」は、1913年にポストンで執筆されたが、全幕完全版として作曲されることは無く、幻のオペラとされてきた。昨年12月、《妙高市文化ホール開館30周年記念事業》として、欧米でも活躍著しい指揮者の平井秀明に翻訳・台本・作曲が委嘱され、天心没後100年・生誕150年にあたる2013年12月1日、天心の終焉の地・妙高市にて世界初演が行われた。

原作は人形浄瑠璃や歌舞伎で有名な「信太妻伝説」に基づき、安倍野の領主安倍保名に命を助けられた女狐コルハが、魔導師・石川悪右衛門に誘拐された保名の許婚・葛の葉に化けてともに暮らし恩返しをするが、保名を捜し歩く巡礼の一行に遭遇し、葛の葉が生還したことを知り、魔力を秘めた宝玉を我が子(後の陰陽師、安倍晴明)に授け、身を引く犠牲の愛が感涙を呼ぶ物語。

第1幕前半から悪右衛門役の豊島雄一(バリトン)の歌唱は抜群の迫力に満ち、決闘で対峙する保名役の猪村浩之(テノール)の情熱的な歌唱も加わり、序盤からドラマを高揚させた。新鋭ソプラノ高橋維の華麗なソロにリードされる合唱曲が多いのも特徴的で、混声合唱は狩人、兵士、巡礼、侍女、狐の妖精など何役もこなし大健闘。第2幕の冒頭では、平井が天心の精神を次世代へ継承すべく敢えて加えた、こぎつね合唱団が微笑ましい歌唱と演技で魅了した。葛の葉・コルハの二役を務めた菊地



第2幕 第1場 アリア「月の歌」

美奈(ソプラノ)は圧倒的な存在感を示し、第2幕の秀逸のアリア「月の歌」を情感豊かに歌い上げ聴衆に大きな感動を与えた。第3幕は序盤の日本情緒溢れる「コルハの子守唄」から、悲劇的な終盤まで、菊地の歌唱や迫真の演技は出色の出来栄で、まさに独壇場。さらに越後高田の瞽女(ごぜ)唄を採り入れるなど、斬新な変化に富む平井の音楽手法がドラマを巧みに展開させる。感極まる巡礼の合唱、東京アカデミック管弦楽団の熱演にも支えられ、悲劇的なクライマックスでは聴衆の涙を誘い、万雷の拍手喝采で幕を閉じた。

全幕を通じて、甘美な愛と醜い欲望の両極を緩急自在に描写し進行する音楽は説得力があり爽快。内外再演多数の前作「かぐや姫」、「小町百年の恋」に次ぐ平井のオペラ三作目とあり完成度はすこぶる高く、作品随所から溢れ出る美しいメロディーや和声感の特筆に値する。第1、2幕とは趣を異にする第3幕の和心豊かな作風との対比は絶妙で、天心の東西の融合に通じるものが感じられた。十川稔の演出は音楽面の深い洞察に基づき、繊細な心理描写やドラマの起承転結も明解に表現し、矢口雅敏の抒情的な照明とともに、日本の美意識を巧みに捉えていた。美術で名高い岡倉天心のあまり知られざる偉業を、世に知らしめる機会を実現した地元関係者の熱意と努力にも賛辞を送りたい。

田辺善之